

The Catcher in the Rye と Romeo and Julietの関連性

～ホールデンとマキューシオ～

外国語学部 英語英文学科 3年

水谷 香澄

世界的に有名なサリンジャーの名作、『The Catcher in the Rye』に登場するホールデンという少年は、つかみどころがなく、一言で言ってしまえば一体何を考えているのかわからない人物である。そんな彼が、マンハッタン駅のサンドイッチバーで偶然知り合った二人の尼と本について会話をしている場面がある。それは以下のようなものである。

“I read *The Return of the Native* by Thomas Hardy, and *Romeo and Juliet* and *Julius* —”

“Oh, *Romeo and Juliet*! Lovely! Didn’t you just love it?”

(中略)

“Well, I’m not too crazy about *Romeo and Juliet*,” I said. “I mean I like them, but — I don’t know. They get pretty annoying sometimes. I mean I felt much sorrier when old Mercutio got killed than when *Romeo and Juliet* did. (中略) I mean I liked him the best in the play, old Mercutio. I don’t know. All those Montagues and Capulets, they’re all right — but Mercutio, he was — it’s hard to explain. He was very smart and entertaining and all.”⁽¹⁾

この後、尼は別の話を振って話題を変えようとする。おそらく、ホールデンの独特な『ロミオとジュリエット』観が理解できなかったのだろう。多くの人にとって、ロミオは情熱的で気品のあるあこがれの王子さまのような存在である。反対にロミオの親友マキューシオは、卑猥なジョークを連発する下品な人物であり、好感を持つ人は少ないだ

ろう。しかし、ここでホールデンが述べているのは、そのような通常の認識とは真逆の意見である。このホールデン独特の『ロミオとジュリエット』観を理解することは、ここまで謎に包まれてきたホールデンの人物像を紐解くための重要なカギとなっているのではないだろうか。竹内康浩著『『ライ麦畑でつかまえて』についてもう何も言いたくない — サリンジャー解体新書』、同著『ライ麦畑のミステリー』、野間正二著『『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の謎をとく』など複数の文献を当たったが、ホールデンのこの注目すべき発言について述べられたものは全くなかった。残念ながら、この場面は多くの研究者の間で、見過ごされてきているようだ。そこで、この論文では、『ロミオとジュリエット』のマキューシオを考察することで、なぜホールデンがマキューシオを好むのか、その理由とホールデンの人物像について考察していく。

まず、マキューシオの表面的な人物像について整理する。彼は、『ロミオとジュリエット』の舞台である、イタリアのヴェローナという街を治める大公の縁戚である。したがって、身分は高く、モンタギューの息子、ロミオの親友として描かれている。シェイクスピア研究で著名な福原麟太郎はマキューシオについて「非常なおしゃべり」であり、その言葉は「非常に機智縦横」であると評している。⁽²⁾ また、マキューシオの得意とすることとして、ありとあらゆる悪口をいくらでも言うところであると述べながら、「非常に痛快な、歯切れのいい男」とであると述べている。⁽³⁾ さらに、河合祥一郎は、ロミオとマキューシオが対照的な人物であるとし、「ロミオが光なら、マキューシオは影」であり、マキューシオは影としてロミオの持つべき「負の部分」、つ

まり「性欲や血の気の多さ」を持っていると言う。
⁽⁴⁾ 二人の述べるマキューシオ像はもっともなもので、マキューシオは高貴な身分でありながら、口が悪く、卑猥なジョークを連発するが、その言葉にはきちんと意味があり、陽気でかなり頭の切れる人物であるというのが一般的な印象だろう。しかし、様々な場面から考察していくと、マキューシオにはもっと暗い影があるのではないかと考えられる。その代表的な例が、一幕四場の43行にもわたるマブの女王についての長台詞である。

O then I see Queen Mab hath been with you:
 She is the fairies' midwife,
 (中略)
 Through lovers' brains, and then they dream of love;
 O'er courtiers' knees, that dream on cur'sies straight;
 O'er lawyers' fingers, who straight dream on fees;
 O'er ladies' lips, who straight on kisses dream,
 (中略)
 Sometime she gallops o'er a courtier's nose,
 And then dreams he of smelling out a suit;
 And sometime comes she with a tithe-pig's tail,
 Tickling a parson's nose as he lies asleep;
 Then he dreams of another benefice.
 Sometime she driveth o'er a soldier's neck,
 And then dreams he of cutting foreign throats,
 (中略)
 This is the hag, when maids lie on their backs,
 That presses them and learns them first to bear,
 Making them women of good carriage.
 This is she— (1.4.53-95)
 そうか、それならマブの女王と一緒に寝たな。
 あいつは妖精たちが夢を産むのに手を貸すんだ。
 (中略)
 恋人たちの頭を通り抜ければたちまち恋の夢
 宮廷人の膝をかすめればたちまち御辞儀の夢
 弁護士の手をかすめればたちまち報酬の夢
 ご婦人の唇をかすめればたちまちキスの夢だ。
 (中略)
 宮廷人の鼻先を駆け抜けければ

口ききを頼んでくる相手をかき出す夢を見る。
 時には教会税用の豚の尻尾を持ってやってくる。
 こいつでもって寝ている牧師の鼻をくすぐると
 牧師は寺禄の増える夢を見る。
 時には軍人の首すじを通る。
 すると、敵兵の首を切る夢
 (中略)
 仰向けに寝ている娘を押さえつけ
 早々と重みに耐える稽古をさせて
 男に都合のいい女を作りあげるのも
 ああなんだ。それに—

マブの女王は、アイルランド、イングランドの民話で、人の夢をつかさどる妖精として語られている。しかし、この43行にもわたるマブの女王の話は、ロミオとジュリエットの許されざる恋、という物語の主筋とは何の関係もない。では、なぜこのような長台詞をマキューシオに語らせる必要があったのだろうか。それは、このセリフがマキューシオの世の中に対する根本的な考え方を表しているからではないだろうか。ここで語られている人間の見る夢は、不死身になりたいというような実現不可能のものではなく、基本的にはすべて実現可能であり、それぞれの立場に合った夢である。つまり、ここで夢として語られているすべてのことは、世の中で実際に起こっている現実のことなのではないだろうか。夢と現実の関連性について、武井ナヲエは「彼らが日中もっとも関心を持っていた事柄を夢に見る」⁽⁵⁾と言及し、ここでも夢と現実には深いつながりがあることがわかる。夢が現実のことだと仮定すると、人間にそのような夢を見させるマブの女王もただの民話の妖精というだけではないだろう。マブの女王は、人間に様々な欲望を抱かせ、身分や立場を作り出す、社会規範そのものを表していると考えられる。この話の直後でマキューシオは次のようにも述べている。

True, I talk of dreams,
 Which are the children of an idle brain,
 Begot of nothing but vain fantasy,
 Which is as thin of substance as the air,

And more inconstant than the wind, who woos
Even now the frozen bosom of the north,
And being anger'd puffs away from thence,
Turning his side to the dew-dropping south.
(1.4.96-103)

そうさ、夢の話だからな。

夢とは閑人の頭が生み出す子供、

男親は中身の無い空想だ。

こいつがまた空気みたいに実態が希薄、

風より気まぐれで、いま凍った北国の胸に

言い寄ったかと思うと、

腹を立ててぶいと向きを変え

雨降る南国に顔を向ける。

ここで言われていることと、上記の夢とマブの女王についての仮定を合わせて考えると、現実社会で行われている全てのことは、実体が希薄で、変わりやすいため、とても無意味だと言っているように見える。また、そのような現実を生み出している社会規範にも意味がないというようにも考えられる。そう考えると、マキューシオのこれら一連のセリフは、痛烈な社会批判になっているのではないだろうか。こう考えると、マキューシオが、表面上は陽気に振る舞っていても、実は社会に何の価値も見出すことができず、失望した若者であることがわかる。世の中に対する彼のこの考え方は、その後の言動にも反映されてくる。

次に、マキューシオの女性観について考察する。マキューシオの一番の特徴といえば、言葉の表現がとても卑猥であることである。二幕四場ではそれが特に顕著で、恋するロミオをからかうマキューシオを止めに入ったベンヴォーリオに以下のように述べる。

Mercutio: Thou desirest me to stop in my tale
against the hair.

Benvolio: Thou wouldst else have made thy tale
large.

Mercutio: O thou art deceived; I would have made
it short, for I was come to the whole
depth of my tale, and meant indeed to
occupy the argument no longer. (2.4.86-
90)

マキューシオ：話の奥底まで突っ込もうってのに
水さすのか。

ベンヴォーリオ：止めなきや、お前の話はでかく
なる。

マキューシオ：そうじゃないよ。短く切り上げる
つもりだった。行くところまで
行っちゃって、底を突いたからな。

マキューシオのセリフの tale は隠語として男性器を意味するなど、セリフに見られる言葉使いや言い回し全体が性的な意味を暗示している。このように、マキューシオのセリフの多くは卑猥で、性的な表現を含むものばかりである。そして、それは恋愛や女性性が話題であるときに特に顕著である。このことから、マキューシオは恋愛や女性性を性的な面でしかとらえることができないのではないかと考えられる。そして、その原因はマキューシオの女性蔑視にあると考える。マキューシオの女性観について、本橋哲也は「男性同士の絆の強調と、その裏面である女性嫌悪」が特徴的である⁽⁶⁾と述べている。男性同士の絆はともかく、マキューシオが女性を蔑視していると考えられる箇所はいくつもある。他のシェイクスピア作品では、恋愛に関して、男の浮気ぐせなど、男性の方を非難することが多い。しかし、マキューシオのセリフで非難の対象となっているのは女性でばかりである。例えば、ロミオがジュリエットに出会う前に恋をしていたロザラインという女性に対しても次のように述べ、非難する。

Mercutio: Why, that same pale hard-hearted
wench, that Rosaline,
Torments him so, that he will sure run
mad. (2.4.4-5)

マキューシオ：やれやれ、青白い石の心のロザ
ライン。

そうまであいつを苦しめるのか、
今にきつと気が狂うぞ。

ロザラインは決してロミオをもてあそんでいたのではなく、むしろロミオが勝手に好意をよせて苦しんでいただけである。それにも関わらず、恋に溺れるロミオを非難するのではなく、ロザライン

を非難するというのはおかしい話である。ロミオの親友だからロミオに味方したということに加え、ここにはマキューシオの女性蔑視も含まれているだろう。それは、神話に登場する、忠実な女性の恋人たちに関する次のセリフでも明らかである。

Mercutio: Dido a dowdy, Cleopatra a gipsy, Helen
and Hero hildings and harlots, Thisbe a
grey eye or so, but not to the purpose.
(2.4.41-43)

マキューシオ：ダイドは大道芸人、クレオパトラは色黒のジプシー、ヘレンとヒーローはでれんとした淫売女、シスビーは青い眼しか取り得のないくずだ。

ここで名前の挙げられている女性たちは、通常、自分の恋人を誉める時の比喻としてプラスの意味で用いられることが多いのだが、マキューシオは彼女たちを徹底的に侮辱している。このことから、マキューシオが女性に対して負の感情を持っているということが示唆されている。マキューシオがこれほど女性を蔑視する理由は、前の段落で述べたマブの女王についてのセリフから考察することができる。このセリフの最後でマキューシオは、次のように述べている。

仰向けに寝ている娘を押さえつけ
早々と重みに耐える稽古をさせて
男に都合のいい女を作りあげるのも
あのばあさんだ。(1.4.92-94)

つまり、女性、マブの女王という名の社会規範により、早々に結婚させられ、子を産むだけの、男にとって都合のいい女となるようしつけられているというのである。そこに自分の意志はなく、ただ言われた通りに役割を果たすだけの存在として女性を見ているのではないだろうか。だからこそ、マキューシオは女性に対して蔑むような視線を持っており、女性や愛というものを信じていることができないのではないかと。社会の言いなりとなつて、男に都合よく作られた女など蔑むべきもので、

そのように作られた夫婦や恋人の間に愛など存在するわけがないと考えているのである。だから、彼は恋愛を性的な面でしか見ることができないのである。このように考えると、マキューシオは社会に対して批判的に思っているだけではなく、そこに生きる人々、特に女性に対しても批判的な目を持っているのである。

最後に、マキューシオが決闘の末に、ジュリエットの従兄であるティボルトによって刺し殺される悲劇の幕開けとなった三幕一場の場面を考察する。場面の冒頭では、以下のようなベンヴォーリオとマキューシオの会話が展開する。

Mercutio: Nay, and there were two such, we should
have none shortly, for one would kill the
other. Thou? why, thou wilt quarrel with
a man that hath a hair more or a hair
less in his bread than thou hast; (中略)

Benvolio: And I were so apt to quarrel as thou art,
any man should buy the fee-simple of my
life for an hour and a quarter. (3.1.15-31)

マキューシオ：何人になんてもんじゃない。お前みたいのが二人いてみる、
お互い殺しあつてたちまちゼロ人だ。お前ってやつはな、いいか、相手の髪がお前より一本多いか少ないかってだけで喧嘩を売るんだぜ。
(中略)

ベンヴォーリオ：俺がお前みたいに喧嘩っばやかったら、誰かが俺の命を丸ごと買うとしても、命がそいつの手にあるのはせいぜい一時間と十五分だ。

ベンヴォーリオの返答からもわかるように、ここでマキューシオが話しているのは、彼自身のことであり、彼がかなり喧嘩っばやい人物であることがよくわかる。その喧嘩っばやさがあだとなり、命を落としてしまうわけだが、ここでマキューシオの短気な一面が描かれている理由は、ただ単にそれが命を落とす原因になったからだけではない。そもそも、マキューシオはモンタギューの人間で

はないため、キャピュレットのティボルトと争う理由は何もない。親友、ロミオのためだったと解釈しても、死ぬ間際に”A plague a’both houses! (どっちの家もくたばりやがれ!)” (3.1.87.95.102) と三回も言っていることを考慮すれば、必ずしもロミオのためではなかったとも考えられる。とすれば、ここでの喧嘩の原因は、結局、マキューシオ自身がティボルトに対して腹が立ったからであると考えるのが自然だろう。彼のこのような行動は、あまりにも自暴自棄あると言える。マキューシオは二幕四場でティボルトについて、”the very butcher of a silk button, a duelist, a duelist; (絹ボタンを狙ってはずさない。剣士も剣士、無双の腕だ。)” (2.4.22-23) と述べていることから、マキューシオはティボルトが優れた剣士であることをよく知っていたと思われる。それにも関わらず、ただむっとしたという理由で、ティボルトに対してやたらに決闘を申し込むというのは、あまりにも無茶な行動ではないか。マキューシオが短気で、このような自暴自棄な行動をしてしまう原因は、やはり彼の世の中に対する考え方にあるのではないだろうか。ここまで述べてきた世の中や人に対する彼の考え方を考慮すると、マキューシオは社会に何の価値も見出すことができず、そのルールに従い、普通に生きている人々にも批判的で、世の中に対し、とても失望した若者であると言える。そのような彼にとって、自分には意味がないと思える世界で生きていくしかない、やりきれない気持ちを晴らす唯一の手段が喧嘩だったのではないだろうか。三幕一場におけるマキューシオの短気な性格の描写やティボルトとの決闘は、自暴自棄になった彼の心理を表していると考えられる。死ぬ間際に三度も繰り返した”A plague a’both houses!” という発言は、くだらない争いを繰り返してきたモンタギュー、キャピュレット両家への軽蔑とともに、そのような争いを生み出し、止めることのできない社会に対するマキューシオの怒りの表れではないだろうか。

ここまで述べてきたマキューシオの人物像をまとめると、彼は社会のあり方に疑問を持っており、無意味な社会規範の中で、何の疑問も持たずにそれを受け入れて生活している人々に対しても批判

的である。世の中に失望しながらも、どうすることもできないやるせない気持ちから、喧嘩という自暴自棄な行動にばかり走り、ついには命を落とすこととなった。言わば、マキューシオはロミオとジュリエットとは違う形で、大人の作った不都合なルールと社会の犠牲となったのである。

ここで、冒頭の問いに戻りたい。不都合な大人の社会の犠牲者であるマキューシオを、なぜホールデンは気に入っているのかということである。それは、ホールデン自身がマキューシオととても似た人物であるからではないだろうか。ホールデンの妹、フィービーからは、”You don’t like anything that’s happening. (結局、世の中のすべてが気に入らないのよ)”⁽⁷⁾ と言われている。彼もまた、マキューシオと同じように、現在の社会の中に自分の居場所を見つけることができず、生き苦しい思いをしている若者なのである。スペンサー先生の”Life is a game that one plays according to the rules. (人生とは実にルールに従ってプレイせにゃならんゲームなんだ)”⁽⁸⁾ という発言に、心の中で強く反発するホールデンには、マブの女王の長台詞で社会を批判するマキューシオの姿と重なるものがある。ホールデンにとって、女性はずしも蔑むような対象ではないが、世の中で普通に生きている人々の多くは、ホールデンにとって理解しがたい存在である。また、かなわないとわかっていながら、ルームメイトのストラドレイターや売春婦を斡旋するエレベーター係に歯向かっていく自暴自棄な一面も見られる。それでも、表面上はただふざけているだけであるかのように振る舞い、心の闇を見せることはない。このように、ホールデンとマキューシオにはじつに多くの共通点がある。ホールデンは、『ロミオとジュリエット』を読んだ時に、マキューシオの心の闇を感じ取り、自分自身と重ね合わせて読んでいたのではないだろうか。だからこそ、マキューシオが死んだ時には、自分自身の未来が閉ざされてしまったかのように感じ、とても悲しかったのではないか。だとすれば、ホールデンの『ロミオとジュリエット』観は、ホールデンがこの物語の中で自身の繊細な人物像をはじめて密かに読者に明かす、きわめて注目すべきセリフなのではないだろうか。

註

- 1 J.D.Salinger. (1991) *The Catcher in the Rye*. 講談社 p.171
- 2 福原麟太郎 (1988) 『シェイクスピア講演』 講談社 p.120
- 3 福原麟太郎 (1988) 『シェイクスピア講演』 講談社 p.120
- 4 河合祥一郎 (2005) 『『ロミオとジュリエット』 恋におちる演劇術』 南雲堂 p.106
- 5 武井ナヲエ (2005) 『シェイクスピアと夢』 南雲堂 p.106
- 6 本橋哲也 (2009) 『侵犯するシェイクスピア—境界の身体』 青弓社 p.77
- 7 J.D.Salinger、前掲書、p.260、J.D サリンジャー (2006) 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』 村上春樹訳 白水社 p.286
- 8 J.D.Salinger、前掲書、p.16、J.D サリンジャー、前掲書、p.17

引用文献

- ・ Shakespear, William. (1982) *Romeo and Juliet*. edited by Roma Gill, M.A. Cantab., B.Litt. Oxon. Italy. Oxford University Press
- ・ シェイクスピア (1996) 『ロミオとジュリエット』 松岡和子訳 筑摩書房
- ・ Salinger, J. D. (1991) *The Catcher in the Rye*. Japan. 講談社
- ・ J.D サリンジャー (2006) 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』 村上春樹訳 白水社
- ・ 竹内康浩 (1998) 『『ライ麦畑でつかまえて』 についてもう何も言いたくない—サリンジャー解体新書』 荒地出版社
- ・ 竹内康浩 (2005) 『ライ麦畑のミステリー』 せりか書房
- ・ 野間正二 (2003) 『『キャッチャー・イン・ザ・ライ』 の謎をとく』 創元社
- ・ 福原麟太郎 (1988) 『シェイクスピア講演』 講談社
- ・ 河合祥一郎 (2005) 『『ロミオとジュリエット』 恋におちる演劇術』 みすず書房
- ・ 武井ナヲエ (2005) 『シェイクスピアと夢』 南雲堂
- ・ 本橋哲也 (2009) 『侵犯するシェイクスピア—境界の身体』 青弓社